

第五章 愁いは薄暮に因（よ）つて起こる

開元四（七二六）年九月。

「どうぞ御遠慮なしに願います。全て叔父上にと持って参りました」。

なみなみと杯を満たす。

「我輩が何のためにわざわざここにまで来たのかといえ、もとよりこのため。遠慮はせぬぞ」。

叔父の孟敬規は、鬢に挿していた菊から一輪摘み取り、ひよいと杯の中に落とす。

「重陽の節句にはちと早くとも、せつかく山にまで来たのだ、長生きを願っても悪くはあるまい」。

ぐっと杯を覗き、

「ほほう、これは聖人であるか。山中に来たつて出逢うのが、神女ならずしてこの聖人であるとは、まことに結構、結構」。

聖人とは澄んだ酒の隠語。

「いまの開けた世に、神女にはなかなか逢えませんかしょう」。

「いたとしても、君をたぶらかすのは、いかなる美女も難しかろうな」。

叔父は笑う。

今朝早くに、弟の孟洗然とともに三人で南園を出た。山への登り口である解佩渚で、叔父は「南園老が長生きをされたのは、ここで菊の花を摘んだお蔭だったというのは、諸君等は知っておるかな」と、その日の様子を語り、「我輩もあやかろう」と菊を折り取った。解佩渚は、鄭交甫が神女に出逢ったと伝えられる場所である。

叔父は、杯を掲げて聖人の香りを嗅いでから、四つの瓢箪を順に叩き、「これら全てが聖人かな」。

「聖人は二つで、二つは賢人です。これら全部を叔父上にお飲みいただく

と思っています」。

濁った酒を賢人という。

四つの瓢箪を孟浩然と弟が腰に下げ、弟はさらに筵と若干の食べ物や背に負って来た。

「昔、孔子は、欽慕する周公を夢に見ぬようになって、我も衰えたと嘆いた。我輩は、聖人、賢人を夢に見ないことはない。聖人、賢人を希求する我輩の心は、孔子と違って、いつまでも衰えを知らぬのである。諸君等は、日頃より、御苦労にも、昔の聖人、賢人の言葉の滓をしゃぶっておるのだから、こうして聖人、賢人を前にして、指をくわえているのは辛かろう。全部を飲んでいいと言われて断る気は毛頭ない。しかし、我輩としては、諸君らが涎の落ちるのを堪え忍んでいる姿を見るのは愉快でない。正直言つて、諸君らに飲ませて瓢箪の中身が減るのを惜しがらぬものでもない。精一杯遠慮して、少しならば飲んでもらいたい。で、杯はこれ一つしかないのか」。

周公とは孔子が理想とした古の聖人だ。

「叔父上にお飲みいただくのにつつあれば十分と思いました」。

「どうも、怪しい臭いがするぞ。この聖人ではない。諸君等だ。何の魂胆であるのかな」。

叔父は鼻をひくつかせる。

「魂胆など何もありません。お酒のお好きな叔父上に、たまには心ゆくまでお飲みただこうと思っただけです」。

「心ゆくまでか。もう長いこと、そのようなことがない。いつあったかも覚えておらぬ。我輩が心ゆくまで酒を飲んだらどういふことになるのか、諸君等も知らぬ訳ではあるまい。それでも飲ませようというのだから、魂胆なしとは考えられぬ。まあ、それはいらぬ詮索というもの。諸君等の計略に落ちるとわかつていても、聖人、賢人に会いたいと熱情には勝てぬがこの我輩である」。

叔父は、杯を前に突き出したまま顎鬚をしごき、胸を斜めにそらせる。

孟浩然は、杯の底に手を添えるような仕草で勧める。

「計略も何ありません。さあ、重陽の当日にこの好天にまた恵まれるとは限りませんから、長寿のお酒をどうぞ空けて下さい」。

ここは万山（ばんざん）の頂。万山は、岷山より西を見ると、望楚山（ぼうそざん）の北に立つ。

九月九日の重陽の節句に、高所に登って菊の酒を飲むと、邪気が祓われ長生きするという。故郷から遠くにある者は山に立って家郷を臨み、家に残された者は旅の空の者を想う。

襄陽の人々は、重陽の節句に、最も眺望のいい岷山に挙って登る。山簡がかつて重陽の日に登ったと伝えられる望楚山に行く人もいる。万山となると登るのは稀だ。他人に煩わされないよう、南園から遠い万山を選び、しかも節句の前に来た。

孟敬規は、本人も言うように酒癖が悪い。誰でもかまわずつかまえて管を巻く。酒席で孟敬規に自分から近づく者はいない。孟浩然も苦手としている。それでも、この叔父でなければならぬと見込んだ。叔父以外のたいていの者

は、わかり切ったことを言うだけだ。

昨日の夕方、叔父を万山に誘った。「そんな遠くにわざわざ誰が行くものか。しかも嫌われ者の我輩を連れ出そうとは、どういう風の吹き回しだ。やめておけ」と、いつものごろ寝を決め込んでいた叔父は背を向けた。「友人からお酒を頂戴しまして、なかなか上等そうです。他の者には内緒で、叔父上だけに御賞味いたどうかと、こっそり遠くまでお誘いするのです」。「酒か。それを先に言え。酒があるならば話は別だ。酒のためなら、万山でも、蓬萊山（ほうらいさん）でも崑崙山（こんろんさん）でも、どこへだって出向いてやらぬものではない。たとえ酒を餌に、我輩を罫に落とそうとの魂胆であっても、まんまとひっかかってやる」。

そのように言ってやって来た叔父がいよいよ酒を飲もうとするのを見て、不安が湧かないものでもない。酔っていつも通りになるだけだろうか。弟は「兄上がおっしゃるのには逆らったりしませんか」と言いつつ同行を渋りがちであった。弟は浮かぬ顔で叔父を見ている。

二人の様子を感じ取ったのだろう、孟敬規は杯を持った手を少し下げ、

「これらを我輩が飲んでしまつて本当によいのか。いまになつて惜しくなつていのではないのか。飲んで我輩がどういふことになるのか、諸君等は心配しているのではないのか。それもわからんではないが、ここで遠慮はせぬ。

いざ酒を前にして、我輩は、これまで一度たりとて、怯んだことがない。一升あれば一升、二升あれば二升、敵の多寡によらず、我輩は勇ましくも必ず飲み干して来た。我輩の名は知られていなくとも、南園に一人性質の悪い大酒飲みがいるのはこの近在ではそれなりの評判だ。飲むなど言われても飲む。飲めと言われて決して遠慮しない」。

叔父は、杯をぐいと上げ、顎の先で水平にぐるりと回す。喉がごくりと鳴る。

「酒というものはすべからく飲むべきものである。それはその通りだが、この飲む前というのがまたよい。今日のように、その瓢箪を横目で睨み、飲みたい飲みたいと思いつつと我慢して長い道を歩いて来て、いよいよ杯に

酒が注がれ、それを鼻先に持って来て、しかしまだ飲まずに、自らを焦らし
ているのは何ともいえずいい。諸君等が、何やら気がかりな様子で我輩を見
つめている前で、飲もうとしてなお飲まずにいるのは何ともいえずいい。い
ざこれを口に入れてしまったならば、飲む前の時というのは永久に失われる。
貴重なこの時間はできるだけ延ばしたい。いまは確実に飲めるとわかってい
るから、それができる。我輩がぐずぐずしている間に、諸君等が横取りして
平らげてしまう心配があるのだったら、こうはしていられない。一目散に飲
む。普段は必ず一目散だ。だから、我輩ほど酒に意地汚い人間はいないと見
られている。元来は違う。欲望のままに走るのを抑え、奥ゆかしく楽しむの
が好きなのだ。しかしながら、このごろは、南園はめつきり酒が乏しい。珍
しく酒があるときには、他人を押しつけて飛びつかねばたちまち消えてしま
う。聖人でも賢人でも、愚人でも狂人でも構わない、あればあるだけを我輩
のものにして腹に流し込むのだ。先陣争いには決して負けない」。

叔父は、鼻先が酒に浸るほどに近づけて、目を閉じ、

「これはなかなかよい酒だ。聖人の中でも飛び切りの聖人だ。周公に比すべきものだ。これだけのものを兄さんはどこから手に入れたのか。貫い物とか言っておったようだが」。

「友人から頂戴したのです」。

「賢人もか」。

「こちらは官にお仕えするお方からの頂きものです」。

「到来物とは羨ましい。一篇の詩を差し出すと、その代わりにいろいろなものがもらえる。兄さんは元手なしで詩で稼ぐ。我輩も同じようにできたらどれほど幸せか。残念ながら、諸君等のように詩を勉強する機会が我輩にはなかった。いや、いつものように学舎に難癖を付けるのではない。兄さんの詩のお蔭でこうして酒を飲ませてもらおうとしているのだから、今日はそれは言うまい。それくらいの作法は我輩とて心得ておる」。

「そのようなことも、何も気にされずに、おっしゃって下さい。あたりには他に誰もいないことですし」。

「しかし、いまは慎んでいても、我輩は酒が入ったどうなるのかわからぬぞ。諸君等もよく知っているだろう。お二人さんは後悔しているのではないのか。今さら遅い。近頃はと、また同じことを言うが、酒がまことに乏しい。酒癖の悪さを披露する機会がとんとない。ともすると、一人に一杯だけと、最初から割り当てられていたりする。たった一杯とは、我輩に対してあまりの仕打ちだ。いっそない方がましと思いつつ、しかし、飲む。今日は、まこと久し振りで、酒もこれだけある。酒癖の悪さも格別となるやも知れぬ。まあ、恐れるな。我輩を敢えて連れて来たのだから、覚悟はできているのだろう。遠慮はせぬぞ。さて、べらべらしゃべっていると、さすがに喉と腹の方が怒り出す。匂いばかりでは我慢できぬと、ほら、ごろごろ鳴っている。では、いざ聖人に見参、見参」。

叔父は杯に口を付け、ひと嘗めして、ぺちやぺちやと舌を鳴らす。

「匂い通り、これはいい酒だ。たまらん、たまらん、たまらんぞ」。

次に口へと注ぎ、一息に飲み干す。底に残った菊の花をつまみ、花びらか

ら滴る酒を舌に落とし、花をしゃぶり、むしゃむしゃと食べる。

「いやあ、本当にこれはいい酒だ。兄さんはいい友を持っている」。

掌で口を拭い、それも嘗める。

「叔父上に褒めていただけで安心しました」。

酒を贈ってくれたのは王廻（おう かい）である。鹿門山の奥深くにある精思観にいたるときは白雲先生と号する。精思観は道教の修行の場として王廻が自分で建てた。王廻は孟浩然より十歳ほど年長で、襄陽の町では立派な門戸を構えているらしいが、精思観では俗界のことは一切尋ねない。

王廻に初めて会ったのは、鹿門寺を出た張子容と別れて半年ほど後。そのころはひたすら鹿門山の道を歩き、行く先々で詩句が湧いて出た。鹿門山のありとあらゆるものが詩そのものであるかのようにだった。鹿門山の奥になお見知らぬ竹林があり、細い道の先に小さな茅屋があった。それが精思観だった。

白雲先生は道教の教義について何も語らない。静かな時を共に過ごすうち

に、坐忘とはかくあろうかと知れて来る。我という存在も、外にある諸々の存在も、一切を忘れ去る境地だ。人と自然の境はなく、鶴が舞い来て遊び、猿が仲間に入って嘯く。

王廻や別の友人から得た酒で叔父を誘ったのは、これからいかにして行くかの見通しを少しでも得たいと思うからだ。叔父に教えてもらおうというのではない。南園でも特に風変わりで、自分が苦手とする人物と敢えて話すことで、思いもよらぬ考えが生じることもあるだろう。

孟敬規は酒をぐいぐい飲み、のべつしゃべり続ける。時に二人の甥に飲ませつつも、大半を自分の腹の中に流し入れ、二本の瓢箪がたちまち空になる。

酔うと、叔父の話はいつも同じ流れた。南園老の時代はいかによかったかという昔語りかひとくさりある。南園老が死んだのは、孟敬規が二十歳を過ぎたばかりのころだから、叔父が直接に見聞したことよりは人から聞いたこ

との方が多くははずなのだが、全てを自分が見たかのように語る。幾度となく繰り返して語って来ただけに、話っぷりは洗練され、南園老の姿がまざまざと浮かんで来る。耳に蝸でも、思わず引き込まれる。孟浩然が南園老について知るほとんどは、実のところこの叔父から聞いたことだ。

古き良き昔を存分に語り、それに引き替えいまはと、不平不満を並べ立てるのがいつものお定まりだ。そうなる前にと、孟浩然は少しばかり姿勢を改め、三本目の瓢箪から酒を注ぎ、

「実は叔父上にお聞きしたいことが幾つかございます。いまでもよろしいでしょうか」。

「おっと、いよいよおいでなすったか。その衣の下に、何の計略を隠しているのかと警戒していた。酒の前で決して怯まぬ我輩だ。恐れはせぬ。ほほう、今度は賢人であるか。澄んだのもよし、濁ったのもよし。これがあるなら、兄さんの計略におめおめとはまるとするか」。

叔父はとろんとした目で微笑み、鼻先を濁り酒に近づける。

「ふむ、これもなかなか結構なものを見た。いざいざ賞味せん」。

一口飲み、

「味が変わると、心持ちも変わる。聞きたいことが幾つかあると、兄さんは言われた。我輩はたぶん寡黙ではない。ここに来てからも、ここに来る前からも、我輩はいろいろと話したように思う。それらは、有り体に言つて、兄さんにとつては、さして聞きたいことではなかつたのだろうな。新味のない話ばかりであつたから仕方あるまい。それに、諸君等が常々学舎で聞かされている立派な話とも違ふ。我輩とて、そのあたりのことは重々承知している。性懲りもなく昔話をするのは、我輩が話さなければ、誰も話者がいないと思うからだ。そのところは心得ていただきたい。とはいへ、自分一人の得手勝手を押し付けるのはよろしくなからう。さあ、兄さんが聞きたいと思つていることを言つてくれ」。

飲み干した杯を置く。孟浩然が再び満たすと、叔父は「今度はおまえたちだ」と手で示す。孟浩然は半分ほど口をつけて弟に回す。弟は心配そうに兄

を見ている。

この叔父に自分は何を期待しているのか。いまさら引き返せない。静かに独り言のように話し始める。

「自分のことは自分ではなかなかわからないものです。南園には、同世代の従兄弟や又従兄弟が大勢います。その中でこの私はどのような存在なのでしょう。このようなことを言い出すと自惚れていると思われるかも知れませんが、叔父上がいまお話されていた南園老には、格別に可愛がっていたのだとよく聞かされました。私はそのことを覚えていません。どうして私だったのでしょうか。亡くなる少し前に私が生まれたので、それだけでも可愛く思えたのでしょうか。楮先生には特別な扱いをいただいています。それはどなたも知っている通りです。他の弟子なら嚴重にお叱りになるようなことも、私には何もおっしゃいません。他の従兄弟たちとはいささか違って大目に見られているのいいことに、私が勝手なことばかりしていると思っておられる方も多いでしょう。それは事実だと言うべきです。五年もの間、

鹿門寺に籠っていました。他の人が汗水垂らして働き、あるいは、学舎で懸命に勉強している間に、私だけが鹿門寺で呑気に詩を詠んでいました。私が鹿門寺に籠りたいと申しましたとき、たくさんの人が反対しました。当然です。特に反対はしないまでも、ほんどの人がいい顔をしませんでした。ところが、叔父上だけが『一人ぐらいそういうことをする人間が南園にいてもいい』と言って下さいました。私の身勝手が容認されたには、叔父上のお言葉が随分と効いたのでした。感謝しています。どうして叔父上は『一人ぐらい』とおっしゃって下さったのでしょうか。その訳をお聞かせいただけませんか」。

叔父はふうと息を吐き、

「何を言い出すのかと思ったら、そんなことであつたか。疾うに忘れたと、ここで言ったならば、計略にはまるのを怖がって我輩が逃げたと言われてしまふだろうか。しかしながら、どうやら忘れたようだ」。

頭の脇をとんとんと叩き、

「何も覚えていない。すっからかんだ」。

「一人ぐらいなら何をしても許されるのでしょうか。私は特別なのでしょうか。そうではないでしょう。当時のことは覚えておられないのならば、叔父上には、いまここで、おまえなんぞは南園の中で何でもないと、厳しく叱っていただきたいと思えます」。

孟浩然は叔父の前に頭を下げる。

「叱れとな。兄さんをか。そう言われても、我輩は、元来ごくおとなしい人間だ。人のことを悪く言ったりするのは好きでない。好きではないが、酒が言わせることはある。叱るのを断れば、忘れたことを思い出せと言われそう。これは困った。兄さんにこれだけ馳走になって、どちらもできないと、知らん顔を決め込むわけにもいくまい。兄さんは、自分のことを身勝手だと言った。身勝手と言えば、この我輩だ。いつもごろごろ働かずにいる。女房に叱られても知らん顔だ。息子ときたら、蠅や蛆でも見るような目を我輩に向けおる。それでも我輩は平然としている。酒があるときは、家にいろと言

われても、いの一番に出て行く。飲めば、人が嫌がろうが、くどくどと管を巻く。悪い評判は襄陽の町にも聞こえている。それを気にしていたら表を歩けない。兄さんがもしもだ、人にどう見られているのか気になっていいるのだ。したら、それは実に下らん。誰にどう思われようと、気にしないのがいい。我輩はそうしている。兄さんは我輩に何か言ってもらいたがっているようにだから、それが一つの助言だ。叱るのではない。我輩はどうやら『一人ぐらい』と言ったらしいが、それは思うに、兄さんのために言ったのではなく、我輩のために言ったのだろう。兄さんが『一人ぐらい』で事が済むのなら、我輩も『一人ぐらい』で事が済む。我輩は大いに助かる。我輩は我輩のことしか考えていない。我輩にとつて都合の悪いことは皆他人のせいだ。だから酔うと遠慮会釈もなしに相手をやつつける。我輩なんぞに聞くのは無駄だ。自分がどのような存在なのかと、兄さんがどうしても気になるのだったら、もつと兄さんに近い従兄弟連中に聞いたらよいだろう。それこそ我輩の倅だっている。あいつは十五になったばかりの癖して、誰に似たものか、小生意気に

も結構いっぱしの口を叩く。我輩のことを『飲んだくれ親父』といつてもこれにしては大変な親不孝者だ。言いたい放題のあいっくに聞けば、兄さんのことも、ぼろ糞に言ってくれるだろう。それに、ここに弟さんがいる。さつきから一言も言わないが、口よりも多弁に、胡散臭い我輩とは話をしても意味がないと、その目が語っている。嫌味で言っているのではない。弟さんはい目をしている。かねてから、こちらの弟さんはなかなかのものだと、我輩は見ている。押し黙っている人間には二種類ある。一つは何も言うことを持たぬ空馬鹿だ。もう一つは本当に言わなければならぬぎりぎりのときにだけ口を開く知恵者だ。我輩は本来は知恵者の方であるのだが、空馬鹿と見られるのが嫌でつい喋ってしまう。何しろ我輩の一番上の兄貴は、あの大変なぼんくらだ。同じ仲間と見られてはたまらない。諸君等の親父さんはまるっきりの空馬鹿と見られていた。我輩としては、兄貴たちとは違ふところを見せずにはいられないというのはわかつてもらえらるだろう。諸君等の母君は間違ひなく知恵者だ。我輩の女房とは違ふ。弟さんは、母君に似て知恵者だと

我輩は見ている。だから、我輩に聞くより、弟さんに聞いてみたらいいと強く勧める。兄として聞きづらいのなら、我輩から聞いてやってもよい。どうだ、そなたの兄さんは、従兄弟や又従兄弟たちの中で、どんな存在なのか、ちよつと言つてみてくれまいか。その酒を残らず飲んで、勢いを付けてからでもいい」。

叔父は、孟浩然がいつまでも持ち続けている杯をひよいと押す。それで初めて気づいたように弟は飲み干す。

「よい飲みっぷりだ。そなたの兄さんがどのような人なのか言ってみてくれ。弟は杯を置き、兄の方を見る。

「まあ、思うように言ってくれて構わない」。

と、孟浩然が言うと、弟は、何か得心したように、「奇妙な人です」。

その一言で唇を閉ざす。

「それでおしまいか。ほほう、奇妙な人か。成程、さすが弟さんだ、我輩も

同意する。それで、ついでに聞くのだが、こちらの兄さんは、我輩よりも奇妙だろうか。

弟は首を傾げ、

「比べ方がわかりません」。

叔父は笑い、

「やはり知恵者だ。奇妙さを比べる尺度がはつきりしていないのに、どちらがより奇妙かを問うのは意味がない。それにだ、そう訊いたのは、我輩には、己が奇妙であるとの自負があるからだ。弟さんは、そんな自負などちゃんちやらおかしいと、思っていてもさすがに叔父には言えないから、『比べ方がわかりません』とやんわりと断ったのだ。知恵者であるな。そういう弟さんの言葉に便乗して、『一人ぐらい』と我輩が言ったのは、要するに兄さんが比べようのない奇妙な人間だからだと説明しておこうか。兄さんが特別に優遇されていいとか、人より優れているとか、そういうことではない。比べられない独特の人間がいた方が、いないよりはましだと、単純に言っただけだ。そういうこ

とだ。我等の孟一族でも、どこかの一族でも、一族には一族ならではの共通性のようなものがある。他人の目にはそれが見えても、一族の中にいるとわからない。一族全員が同じ一族顔をしていたのでは当たり前前すぎて面白くない。一人ぐらい、これが我一族の一員かと、一族の者が疑わしく思う者が混じっていた方がいい。だから、我輩などは、わざとこうして」

と、叔父は瓢箪からどぼどぼと酒を注いでがぶがぶと飲み、

「とんだ飲んだくれだと、蠶躰を買おうとしているのだ。しかし、作為が見え透いて、嫌われている。こちらの兄さんは、作為なしで真に奇妙であるから、逆に、大方の人間は好ましく思ってしまう。さっきの山に籠るといいう話でも、駄目だと言っていた連中も、そのうちぐんにやりとして許してしまつた。我輩の大酒飲みは許してもらえないのに、兄さんは得している。全く羨ましい。それでも、兄さんのように我輩に酒を飲ましてくれるごく少数の奇特な人間がいるように、兄さんを好ましくなくと思う者も皆無ではない。我輩はこれでも情に厚いところがなきにしもあらずだ。逆に兄さんはなかなか

に冷淡である。兄さんに問題があるとしたらそこだろう。鹿門寺に籠ると言い出したころはまださほどでもなかったが、いまではかなり露わだ。おっと、いかん、いかん、つい調子に乗って喋り過ぎた。計略に落ちてしまったではないか。叱ってくれと言った兄さんの望むようなことをした。これは大失敗だ」。

叔父は杯にまた酒を注いで呑み干し、それから、おもむろに奇妙な笑い声を立てる。

孟浩然には思い当たるところがあり、

「私は冷淡なのでしょいか」。

叔父は笑いを納め、のっそり立ち上がり、

「酔った勢いで言ってしまったようだ。兄さんの計略に落ちた。落ちたなりに、もう仕方ないでしょう。兄さんと話をするには、酔っ払いの管巻きではなく、兄さん方の流儀に合わせるのがよかろうかと思う」。

叔父は腰に手を当て、仰々しく咳払いをし、大声を張り上げる。

孝弟也者

親に対する孝と、兄弟に対する悌は

其為仁之本与

仁の根本であるのでしよう。

孔子の弟子の有子（ゆうし）の言葉だ。『論語』に記されている。

叔父は二度繰り返し、

「柄にもなく有難い経典を唱えると喉が渇くぞ」。

どっか腰を下ろし、また酒を飲み、

「何だ、驚いたか。我輩だって『論語』くらい知っておる。楮先生の学舎ができる前は、一族の者が互いに先生になって孔子や子壘子を教え合ったものだ。孝と悌は、一族の結束を保つとても大切なものだ、有子のこの言葉はよく暗唱させられた。小さいときに叩き込まれたものは、酔っ払ってもこの通りちゃんと出て来る。諸君等は、御大層なことを学舎で習っているようだが、孝と悌の根本のところは何もわかっていないと我輩は見ている。字を知るだけではわかったことにならない。昔の南園の人々は、字は知らなくても、先祖からの教えが行き渡っておった。学舎ができて随分と変わった。兄さんが

知るの、孔子や孟子の字面だけだ。そうでなければ、これほど冷淡でいられるはずがない。ただし、我輩は冷淡であるのを一概に非難するものではない。『一人ぐらい』と見られるほどに奇妙であるためには、よほど冷淡でなければならぬ。そうだ、むしろ、もっと冷淡であった方がよい。兄さんには冷淡さが足りない。それを徹底して貫けるのならそれをやってみろ。どうだ、その覚悟があるか」。

叔父は杯を突き付け、孟浩然を見据える。

「孝は主として母上に、悌は主として四郎兄さんについておっしゃっているのでしょうか」。

叔父は孟浩然の肩に手を置き、

「兄さんの『論語』の勉強はまことに中途半端であるようだ」。

叔父は横を向き、『論語』の一節を、今度は静かに唱える。

富而可求也

富というものを求めるべきときには

雖執鞭之士

鞭を手にする馬丁にも

吾亦為之　　私はなりましよう。

如不可求　　富というものを求めないでよいときには

従吾所好　　私は好むところに従うのです。

これは孔子自身の言葉だ。

叔父は横向きのまま、

「いま我輩はまことに我輩らしからぬことをしている。兄さんと話すには、こうした経典から何かそれらしい文句を引っ張って来た方がいいだろうと思うから無理しているだけだ。貢挙の試験でも、知っていることをひけらかすのが大切なのだろう。たくさん知っていて、それを上手に使いこなせる奴が合格する。本当にわかっているかどうかは別だ。学舎で『論語』をどのようなか我輩は知らぬ。かつて我が南園では、孝と悌のためならば、すなわち南園のためならば、富を求めてどのようなことでもするが、富を求めないですむときには、各々が好きなことをしてよいと教えていた。孔子でさえも馬丁になるとおっしゃった。考え違いをしないでくれ。兄さんに馬丁

になれと言っているのではない。吾が好むところに従えと言っているのではない。我輩は、酒を好み、働くのを嫌う。我輩こそが、この孔子の言葉に最も反しているのはよく知っている。我身を弁護するために、兄さんを非難しない。単に、兄さんの冷淡さを指摘して、もつと冷淡であった方がよいと言っているのだ。何だか支離滅裂になって来た。もうやめだ。やめだ。さあ、飲め。我輩のように酒に惑うのもよい。兄さんがどうなろうと我輩の知るところではない”。

叔父は酒を注いで孟浩然の前に突き出す。弟は黙って見守っている。叔父を誘ったのは間違いではなかったようだ。

冷淡との指摘が当たっていると思うのは、一つには、五年半前に張子容とともに鹿門寺を後にしていた方がよかつたのではないかとの後悔があるからだ。そうしていたならば、冷淡と言われずにすんだだろうか。しかし、あの

ときに鹿門寺を出ていたならば、一筋の道こそ辿るべきであったと深く後悔したに違いない。

あのときに、嫌がる張子容に食い下がって襄陽の酒店にまで行って酒を飲み始めたならば、一杯もう一杯と重ねるうちに、別れ難さがさらに募っていつか夜となり、鹿門寺に帰る時刻を失ってしまっただろうか。ならばこのまま張子容と離れまいと決め、張子容が受けるのなら自分もと貢拳を受け、張子容とともに官人になっていたならば、南園の状況は間違いなくいまよりも遙かによかったはずだ。

叔父の言うように、南園は酒にも事を欠く。孟子の教えを受け継いで来た一族であるから、贅沢とは無縁であるのだが、南園老の時代には不足するものなどなく、随分と大きな散財さえもした。南園にいま存在する全ての建物は南園老が計画して順に建てたものだ。最も大きな南園中堂は、南園老の自慢で、襄陽の町から多数の名士を招いて落成式を盛大に行った。その中堂も含めていまではどれもが古びてしまった。色が剥げ、傷みが目立ち、中には

傾いてしまったものもある。

四年前に、南園老の長男の孟漲が死んだ。息子が父に似たのは長寿だったという点だけで、孟漲は家運を大きく傾かせた。慣習を墨守する以外に何の考えもなく、しかも晩年は長らく病床にあつて、有効な策を一つも打ち出さずに終わった。

孟漲が死ぬ半年余り前に貢挙の地方試験があり、孟四が受けた。孟浩然がもしも張子容とともに山を下りていけば、そのときに限っては、孟四とともに試験を受けていただろう。張子容は先に地方試験に合格していて、都での本試験の受験資格を得ていた。張子容とともに本試験に臨むには、地方試験に合格しておかなければならない。そのことがなければ、孟四と一緒に受験したりしない。孟四が眦を決して勉強し、その父が尋常ならざる期待をかけているのを見て、万が一にも孟四を出し抜いて自分だけが合格するようなことあつてはならないと、孟浩然はかねてから考えている。孟四が、孟浩然に強い対抗意識を持っているのもわかっているから、孟四と敢えて争わないの

が孟四に対する「悌」の表れであるとも思っていた。しかし、それはむしろ孟四に対して冷淡な独りよがりであった。

孟四がこのときの地方試験に合格したならば、その父の孟敬通が後継者になる公算が大きいとかなり多くの人が考えていた。孟漲は病気で伏せてからも後継者を明確には定めずにいた。普通には長男の孟敬行が跡取りとなるのだが、孟敬行は父に輪をかけて優柔不断で人望がない。それは父も知るところであった。一方で、孟四の父の孟敬通はいつも陰気な顔で人と交わる事が少なく、人望のなさは、兄と比べればまだまだましという程度で五十歩百歩だ。孟敬通はここが正念場であると、試験に臨む息子に強い期待をかけた。

孟四は過去に一度不合格となり、二度目に懸ける思いはかなりのものがあった。身を削って勉強し、楮先生は前にも増して厳しく指導した。他人の真似できない猛勉強を支えに、孟四は合格できるとの自信を強め、先生の長年の恩に報い、父親のため、そして一族の期待に応えるべく、試験の日を待った。ところが、覚悟が強すぎたからなのか、試験の前の晩に、突然の高熱を

発した。翌朝も熱は下がらず、ふらふらの状態で試験会場に向かった。朦朧とした頭で答案用紙に文字を埋めるのもままならず、試験から帰った息子を抱いて父は号泣した。

孟浩然は、その顛末を鹿門寺で、いつものように荷を担いで来てくれた孟馨から聞いた。後悔は、このときにもしも一緒に受けていたならば、孟四の負担がいくらかでも軽減され、高熱を出すことなく試験に臨めたのではないかということにあった。孟四は孟浩然の存在を強く意識している。それでも、一人であらゆる期待を背負うよりは、従弟がいた方が気が楽になるのは間違いない。孟四は合格するに十分な力を具え、普段通りの調子で試験に臨みさえすればよかったのだ。孟浩然が同時に合格しても、その父が南園の後継者に選ばれることは絶対にならない。

孟漲は死の直前になってようやく孟敬行を後継者に指名した。息子の失敗で憔悴し切ってしまった孟敬通は南園を背負う状況になかった。

南園中堂で行われた祖父の葬儀には、孟浩然も山から下りて加わった。葬

儀を取り仕切ったのは、孟敬行ではなく孟振だった。孟敬行は南園の主になったのにもかかわらずまるで存在感がなかった。孟四の父は十歳以上も老けたようにやつれていた。孟四は葬儀に姿を見せなかった。そのようなありさまならば、孟振が後継者になってもいいようなものであるのだが、孟振は傍系である上に、孟漲の弟たち、つまり孟振の伯父たちが揃って孟敬行を支持した。孟振はその妻の霍大叔母とともに癖が強くて扱い難く、孟敬行の方が無難だということだった。

孟漲には十二人の弟がいた。孟振の父の孟漾（もう よう）も含めて五人がすでに他界し、七人が存命であった。その中でただ一人、南園老の血判状に名を連ねていなかった者が、忽然と葬儀に現れ、人々を驚かせた。末弟の孟演（もう えん）だ。

孟浩然は初めてその姿を見た。立派な衣服を纏い、堂々とした体軀で、声に張りがあり、時に六十歳であったのだがきびきびと若々しかった。孟演の前では、孟振さえも存在が霞んだ。孟大がせめて体格で見劣りしないだけだ

った。葬儀の後で、孟演は南園の人々を睥睨し、孟大を指で招き寄せ、少しく話をした。去り際に孟浩然のもとへと歩み寄り、「鹿門寺の隱者とは君か。遠くにいて南園から聞こえるのは、唯一君の名だ。せいぜい励むのだな」と言った。非常に威圧感があり、嫌な印象が後まで残った。

孟演は襄陽を離れて手広く商売を展開し、大きな財を築いていた。孟大に向かつて言ったのは、商売の拠点を近々襄陽に移すつもりで、そうなれば南園にも時折は来るであろうから、かつて住んでいた建物を直して使いたいということであった。孟浩然の名が聞こえると言ったのは、孟浩然の詩が世間に広まりつつあったからだ。

張子容と別れて以来、詩句がおびただしく湧いて来るようになっただけでなく、詩境にも著しい進展があった。その詩が人々に知られるようになったのには、張子容が大きく関った。張子容は山から下りた翌春の貢奉に拔群の成績で合格し、地方官としての任務に就いた。合格直後から、張子容は詩に優れると都で評判になった。「我が故郷の襄陽には私より遥かに優れた詩才の

持ち主がいます」と、張子容は孟浩然の詩を披露した。それは謝靈雲の山水詩とも陶淵明の田園詩とも異なり、また宮廷で流行する詩風とは一線を画す清新なものであった。

評判は立っても、自分の詩はまだまだと感じていたから、一筋の道を歩み続けるべく、祖父の葬儀が終わったならばすぐに寺に戻る考えだった。しかし、三年ぶりの南園は暗く沈み、とりわけ楮先生の様子が気がかりだった。長身の先生が背を丸め、苦難に独り耐えるかのような表情で、とぼとぼと歩むのを見て、胸が痛んだ。孟演の出現は不気味なものがあり、孟大もこれからがますます大変であろうと懸念された。南園のために、楮先生のために、孟大のために、張子容の後を追って貢挙を受けるべきではないのかとの考えが生じ、鹿門寺に帰っていいものかためらいが生じた。

孟演が去るのを見送ると、孟大が「君は鹿門寺にいるのがいい。南園のことは何一つ気にしなくてよい」と言ってくれた。それに対して答える言葉を探していると、楮先生が孟浩然の肩に手を置き、「時よ時、再びは来らず」と

静かに唱えた。先生は先ほどまでとは違つて背をぐいと伸ばし、その声は天からのように聞こえた。

それは褚先生が学舎で好んで使う蒯徹（かい てつ）の言葉だ。蒯徹は、項羽（こうご）と劉邦（りゅうほう）が天下を争つた時代の軍略家で、韓信（かんしん）に天下三分の計を説いた。韓信は劉邦と同盟を組み、それによって、劉邦は項羽に対して優位に立てるようになった。劉邦がその優位を生かして項羽を滅ぼしたならば、次に韓信も滅ぼそうとするだろうから、三者の均衡を保つて、隙あらば天下を窺うのがよいと、蒯徹は韓信に説き、「時よ時、再びは来らず」と言つて、いまを逃してならないと速やかな決断を促した。韓信は逡巡してその策を採らず、劉邦に全面的に協力して項羽を滅ぼした。後に、蒯徹が予言した通りに、韓信は劉邦に殺された。褚先生は学舎で歴史を談じてしばしば熱くなり、誤つた選択がなされたところで、「時よ時、再びは来らず」をよく引く。数十年前に、則天武后が皇后になるのを褚遂良が阻み得なかつたために、唐の運命も、先生自身の運命も大きく変わってしまったのを、

今に至っても一大痛恨事としているからであろう。

楮先生は、弟子の自分が心配しなければならぬようなやわな人ではないと、孟浩然是覚った。一筋の道を選んだからには、いまはそれを続けるべきだと改めて心を定め、即座に鹿門寺に向かった。その背を弟が追った。「兄上はいつまでも山におられるのですか」。弟の問いに、「詩が成らぬ内は降りられないとするならば、一生かかっても降りられまい」と答えた。その瞬間に、遠からず降りねばならなくなるだろうと思った。

それから二年ほど経った一昨年、春に、父が死んだ。いつものように岷山と向かい合って立つその背を妻が叩くと、息がすでに通っていかなかった。

その少し前に張野人に会ったときに、「何ですな、坊ちゃんは、山の氣に染まり過ぎたのではありませんか。山中で不意に出くわすと、山の精と見間違えてしまいますな。十年、二十年も先になってできる詩を作ってこれから困りましょうと、以前に申し上げました。いまでは五十年も六十年も先に行ってしまったかのようです。ここらで俗氣に当たった方がよろしいのではあ

りませんかな」と言われた。孟浩然自身もそのように思うところがあった。山の中には詩がいくらでもある。しかし、鹿門山でしか詩が生まれ出て来ないのならば、自分の詩は本物であるとは言えないだろう。父の死は、その時は来た息子に告げるかのようにであった。一筋の道を見失いかねないとの恐れがありながらも、鹿門寺の住いを取り払って山を下りた。

母はいつも通りに畑仕事をしていた。父の亡骸の前で哭すと、父と同じく、自分は南園にいなければいけないと思った。父の葬儀は、「人様に厄介はかけられぬ」との母の意向で、ごくひっそりとしたものだった。褚先生と、莫家に嫁に行った妹が加わった。褚先生は、太古の人々に最も近かったと、父を讃えた。褚先生はかつての活力を完全に取り戻していた。妹は「これからはいずれにしてもお母様の近くにいるのでしよう」と兄に言った。孟浩然は褚先生に服喪の礼法を教わり、二十七カ月間の喪に入った。

母は、自分に必要なものは自分の田畑で自分で賄おうとし、一族の者に一切の手助けを請わなかった。孟浩然是弟とともに母を手伝った。畑を打ちな

がら、あるいは草をむしりながら、我知らずに手が止まり、岷山を見ていることが幾度かあった。喪の間はひたすらに故人を思うのがよい。母は黙々と仕事を続け、息子達の手際がいかにも悪くても何も言わなかった。時々孟大が来て、農作業の仕方を教えてくれた。母は一日中働き詰めで、暮らしぶりは以前に増して質素になった。鹿門寺について、十日ごとに子馨と孟洗然が運んで来てくれるものを当然のように受け取っていた自分の身を恥じ、父母から長く離れていた不孝を悔やんだ。

南園の様子は、祖父の葬儀の際に一度見ていて、子馨や弟から時折聞きもしていたが、実際にそこに身を置いて暮らすと、思った以上に深刻な状況で、ずっしりと重い雰囲気覆われていた。黒くくすんだ古びた家並みが否応なしにその印象を強めた。その中にただ一つ燦然と輝く真新しい建物がある。孟演がたまに来て過ぐす家だ。少年時代に孟演が一時期住んでいたのは、ごく小さな家だった。それを取り払って、敷地一杯に豪壮な家を建てた。南園中堂よりは一回り小さいものの、贅を凝らした造りで圧倒した。孟演の家だけ

が際立つのは、南園が完全に時流に取り残されたからだ。

世は隆盛に向かつて登り坂を駆け上がりつつある。孟演はみごとにそれに乗って大成功をおさめ、全土に商網を広げた。孟郁ももういくという南園にはまだ一度も来たことがない息子がいて江南の地で活躍している。長江下流の江南は唐の経済活動の新たな中心になりつつあり、そこから運ばれる富が、洛陽を経由して長安に及び、都の空前の繁栄を支えている。孟浩然が喪に入ってから間もなくのころに、皇帝は奢侈を戒める詔を出した。それはすなわち奢侈が目につくまでに世の中が豊かになった証左であった。

景雲二（七二二）年の八月、つまり孟浩然の祖父の孟漲が死んだ直後に、李隆基、すなわち玄宗皇帝が皇位に就いた。それまで皇帝であった李旦に対し、妹の太平公主が、讓位を勧めたからだ。太平公主が、甥の玄宗皇帝を皇位に据えたのは、かねてからの叔母と甥の抗争を終わりにして身を引こうというのではなく、次に自分が皇帝になるために巧妙な下準備であった。兄が皇位から降りると、兄が持っていた権限をそっくり自分のものにし、七人の宰相

のうち五人を自分の息のかかった人物にした。

翌年の六月に、玄宗皇帝のもとに、洛陽にいる張説（ちよう えつ）から佩刀が届けられた。張説は、かつて魏元忠が則天武后の愛人と法廷で争ったときに、捨て身の弁護をした人物である。佩刀はいまこそ断を下すべしとの暗示だった。玄宗皇帝は、その翌月、三百余人の兵を率いて決起した。太平公主は甥の動きを警戒していたが、わずかな隙を衝かれた。玄宗皇帝は自ら刀を振るって太平公主の党の者を次々に斬り倒した。太平公主は山寺に逃げ込んだ。甥は皇帝として叔母に死を命じ、則天武后、韋皇后、太平公主と女性が政治を動かした時代が終わった。玄宗皇帝のもと、後に唐の最盛期と回顧される「開元の治」へと歴史は動き出した。

南園は取り残された。孟敬行が無能力であるのは、前まえからわかっていた。叔父たちの庇護のもと、伝統墨寺を唱えるだけだった。何かしら事があって襄陽に向く必要のあるときに、孟敬行は自分が行ってもどうにもできないのはわかっているから、これまで通りに孟振に出掛けてもらわなければ

ならない。孟振は孟敬行を頭から馬鹿にし、勿体ぶってなかなか動こうとしない。孟敬行は頼むことすらまともにできないから、孟大が平身低頭して、ようやく孟振は重い腰を上げる。だから、往々にして手遅れとなり南園は不利な状況に追い込まれる。孟振は自分のせいではないと、孟敬行を非難する。南園は苦しくなり、その皺寄せは弱い立場の者に行く。南園内で何かとごたごたが生じる。孟敬行には何の威信もなく、おさめることができない。孟大が奔走しなければならぬ。

南園が貧乏になり、あちこちに歪みが生じれば、そこから脱出する者が現れるのは必然だ。孟演は南園に来ると、気前よくいろいろなものを振る舞い、世の趨勢と南園の落差をことさらに見せつける。孟演が引き上げるとき、必ず幾人かの者がこっそり後を追う。機転の利く者は孟演に使われ、商売の世界に入る。たまたに帰って来ると、淀んだ南園でいつまでも耐えている連中を嘲笑う。

孟敬規が酔って語る南園老の逸話は、いまや悲しくも夢のような物語だ。

その南園老に見込まれて招かれた褚先生は、このような現状を打破すべく、学舎において厳しい指導をする。孟四の二度目の失敗でしばらくは打ちひしがれていたものの、以前の意気軒昂ぶりを取り戻した。孟四も、時間の経過とともに痛手も薄れて来たのだらう、家を出て時々は学舎に来て勉強をし、次にまた試験を受ける意欲を見せ始めている。

孟浩然は、喪の間に南園の有様をじつと見ていた。鹿門寺の住いは取り払い、そうでなくても、明らかに、鹿門山に戻る状況にない。南園のために自分は何かをしなければならぬ。

喪は夏に終わり、明けた最初の日、張野人の舟で漢水を渡り鹿門山に入って精思観を訪ねた。喪の間は、南園から出ることも、詩を詠むことも控えた。精思観で一篇の詩を詠むと、以前通りの自分に戻った気がした。そのまま山から帰らぬ人になりたいとも思った。その気持ちといかにして対峙するのか、自分を試すのが真先に山に行った理由だった。

精思観を後にし、漢水を渡って戻るときに、「迷いが晴れましたかな」と張

野人に問われた。孟浩然是即答できなかつた。鹿門山を振り返ると、一筋の道は山から外には通じていないように見えた。鹿門山を自由に歩いてこそ詩が自在に湧いて来るのであつて、外ではそうはならないのではないのか。「叔父貴は釣りを止めようと思つたりはしないのですか」。「食つて、寝て、糞を垂れる以外に何もすることのない苦痛に耐えるのは難しいですから。欲の塊であるあつしにできるのは釣りくらいでしような」。孟浩然是、自分にできるのは詩を作るだけだと思ひ、最も俗な場においていかなる詩が生まれるか自分に課してみなければならぬと考へた。

喪が明けたのを知つて様々な人々が声を掛けて来た。俗世間と長らく交遊を絶ち、詩に新境地を開いた孟浩然是、人々の関心の的であつた。孟浩然是全ての誘いに応じ、請われるままに詩を詠んだ。いかなる場でも詩は即座に生まれた。人々は称賛し、詩の返礼としてなにかの品を贈つてくれた。そのような効用を詩に期待したのではなかつたが、成り行きとしてそうなつた。

叔父が突き出した杯を手に受けて飲み干し、酒を満たして返すと、二本目の瓢箪も空になる。

「叔父上は毛公（もうこう）をどう思われますか」。

叔父は額に手を当て、

「はて、毛公とな。我輩が『論語』を唱えてみせたからといって、もともと兄さんのように学問を積んでいない。難しいことを尋ねられても困る。毛公とは何者か。君は知っているか」。

叔父は孟洗然の肩をつつく。

「兄上がおっしゃるのは後漢の毛義でしょうか」。

孟浩然が同意すると、

「やはり知恵者と我輩が見ただけのことはある。ならば、大儀であろうが、我輩に教えてくれ、その毛義とやらを。それを聞いてから、泥縄ではあるけ

れども、兄さんの問いに答えるとしよう。」

「毛義という人は、貧しかったそうです。節義を守り、老いた母によく仕えて孝行者で、その土地で悪く言う人はありませんでした。張奉（ちょうほう）ほう」という人が噂を耳にし、我が目でその人となりを見ようと会いに行きました。挨拶を終え、いざ話を始めようとしますと、にわかには府の長官の使いが到着し、毛義を県の長官に取り立てるとの辞令を高々と読み上げました。それを聞いた毛義の顔面に喜びが溢れ出て、その辞令を奉じて、転ぶようにして母の居室へと入って行きました。張奉はそのありさまを見て、毛義の正体はこれで知れたとがっかりして帰りました。後に、母が亡くなると、毛義は即座に官服を脱ぎ棄てて県の長官を辞め、その後は、どのような招きにも応じることがありませんでした。それで張奉は言いました。『賢者はもとより測りたいものだ。先の日に喜んで見せたのは親のためにわざとしたのだった。いわゆる、家貧しく、親老いたれば、官を選ばずして仕えるべしとはこのことだ』。

孟浩然が淀みなく言うと、

「いやはや、これは驚いた。ふだん無口の弟さんが、こうもすらすら語ってくれるとは。感心、感心。そのままきれもない賢者ぶりに、そして毛公の賢者ぶりに、この賢者の杯を捧げるとしよう」。

叔父は四本目の瓢箪に手をかけてから一考し、

「で、こちらの兄さんの問いに我輩は答えると言いはしたが、急に気が変わった。なに、我輩には難し過ぎる問いなので逃げるのだ」。

叔父は大きく息を吐き、自分で酒を注いでぐいと煽る。

弟はじつと兄を見ている。

孟浩然は膝を進め、

「では、別の事をお尋ねします。我が一族は遥か昔より代々孟子の教えを伝えて来ました。この伝統は今後も守り続けるべきであるとお考えではありませんか」。

「ますます難しい問いだ。我輩に、本気でその答えを求めているのか」。

「ええ、ぜひ叔父上にお聞きしたいのです」。

「我輩は学舎のことをいつもよく言っていない。それを承知で敢えて尋ねるのか。困ったものだ。しかし、ここでまた続けて逃げるのも癪だ。一つこうしよう。兄さんがこの酒を一息に飲んで、それでも我輩から聞きたいという気が変わらないのなら、答えてやらないものでもない」。

瓢箪から杯を満たし孟浩然の膝先へと押す。即座にぐいと飲み干す。

「みごとに飲みおったな。それで、やはり我輩に聞きたいか」。

「ええ、お願いいたします」。

「強情な奴だ。ならば、仕方あるまい。ここは我輩とて、気を引き締めて答えねばなるまい。よし、わかった。我輩は二つ提案する。第一は、一日も早く楮先生には長安にお引き取りいただくよう、兄さんから言ってもらいたい。どうだ。やってくれるか」。

叔父は返事を待たずに、瓢箪を手にしながら、

「これは兄さんの詩が稼いだものだ。兄さんの詩は、山に籠ってから、人様

が酒を贈ってくれるまでに上達した。鹿門寺でどういふ鍛錬をしたのか知らぬが、それができたのは、我輩のお蔭と思ってくれていい。だから、我輩にはこの酒を飲む資格があると主張しても、さほど勝手な言い分ではあるまい。ただ、兄さんが詩を上手に作れるようになったとおおもとはは楮先生の教えがあるのは、我輩とても否定はしない。我輩は楮先生に習っていないから、いくら酒が欲しくても詩を作れない。我輩がこの酒をここで飲んでいられるのは、元をたどれば楮先生のお蔭であると、我輩は素直に認める。ならば、酒を飲んだ勢いで、事もあるうに楮先生を追い出せと言うのはもつての外である。感謝の念を楮先生に持たねばならない。事実、持つておる。それにだ、我輩とて、子どもころより、孔子だ孟子だと聞かされて育つて来た。楮先生を南園にお招きしたのは南園老だ。南園老に反するようなことは決してしてはならない。学問は大切にしなければならぬものだということはいわゆる我輩もわかつてゐる。いいか、我輩は何もかもわかつてゐるのだ。だからこそ、すっかり嫌気がさした。我輩でさえ、頭の隅を叩けば、孔子や孟子の言葉がぼ

ろりとこぼれ落ちる。学舎に通う諸君等はなおさらだ。孟子の教えは南園にとつて大切なものだ。千年もの間、それを守つて来たから今日のこの南園がある。それだけに、いいか、もうたくさんだと我輩は思うのだ。孟子の教えを即刻捨てろ。楮先生を追い出せ。どうだ、そうは思わぬか」。

叔父は乱暴に酒を注いで杯から溢れさせ、一気に飲もうとして、途中で激しくむせる。

「ああ、いかん、いかん、孟子の教えを悪く言った報いがすぐに来た」。

孟浩然も幾分か酔いがまわり、叔父のように野放図なことを言ってみたくなる。

それを抑えて、静かに次を問う。

「第一の提案はわかりました。第二の提案は何でしょうか。孟子の教えを捨てて、これからの南園は何をよすがにしていけばよろしいのでしょうか」。

叔父は息を整え、

「よすがか。それが必要であろうか。どうしても何かしらほしいのなら、よ

すがに何がよいか、我輩が考えてやろう。言っておくが、それは第二の提案ではない。途中で訊かれたから答えるだけだ。いいか、我等は唐の民だ。だったら、当然のこととして、唐の律令に従って生きていけばよい。お上に身命を捧げればよい。どうだ、それでいいだろう」。

叔父は孟浩然を見据える。

「南園老はそうしていたのでしょうか」。

叔父は小さく笑い、

「兄さんは怖いことを尋ねる。この山に我等しかいないのはわかっている、それにあからさまに答えるのはやめておこう。南園老は、至極当たり前のこととして、孟子の教えは唐の律令よりもずっと昔からあったと言っておった。それ以上は言わぬ。で、我輩の第二の提案は、兄さんの問いと結び付けて言えば、よすがを捨てるということだ。つまり、漢陰（かんいん）の一丈人（いちじょうじん）を見習えと、我輩は言おう。我が祖は、孔子や孟子の生地である鄒や魯のあたりにいたらしいが、この襄陽の地に来てすでに数百年になる。い

つまでも孟子や孔子の教えではあるまい。この土地に暮らすのなら、この土地の先人に習うがいい。だから、漢陰の一丈人を見習えと我輩は提案する。どうだ、至極全うな考えだろう」。

孟浩然はふうと小さく息を吐いてから、弟に、

「叔父上のおっしゃる漢陰の一丈人を、君はわかるかい」。

弟は首をひねる。叔父はその肩をつつき、

「勉強家の君が知らぬのか。それを我輩が知っておったとは、なかなか我慢できる。褚先生は教えないのだろうか。まるで知る必要のないことだからな」。

孟浩然是弟に説明する。

「莊子の記した寓話だ。漢陰とは漢水の南側、つまりこのあたりなのだろう」。

そこに一丈人、つまり一人の農夫がいた。孔子の弟子の子貢(しこう)が旅の途中でこのあたりを通りかかると、一人の老人が重そうに甕を担いでよたよた歩いて来た。よっこらしよと、畑の中央に甕を置いて、手でぺちやぺちやと水をまいた。水がなくなると、再び、よっこらしよと甕を担ぐ。後に付い

て行くと、深く掘り下げた穴をぐるぐる巡って降りて行き、穴の底に湧き出る水を甕に汲み、またよたよたと上つて来る。老人の息は荒く汗びっしりだ。大変な重労働であるのに、畑に注げる水はほんのわずかだ。子貢は老人に言った。『あなたは撥ね釣瓶のからくりを、ご存知ないのですか。一日で百畦の畑に水を行き渡らせることができます。小さな力で大きな効果があるので、試してみてはいかがですか』。子貢は撥ね釣瓶がどのような仕組みであるのかを説明した。老人は笑い、『私は先生に習いました。』からくりがあると、からくりによって仕事ができる。からくりによって仕事ができると、からくりの心、機心が生まれる。機心が生まれると純白の心が失われる。純白の心が失われると、心は安らぎを失う。心が安らぎを失うと人は道を踏み外してしまう。からくりが便利であるのを私は知らないのではありません。からくりによって生きるのが恥ずかしいからそうしなだけでいいです。子貢は老人が言うのを聞いてすこすこと立ち去った。およそこのような話だ。私は、かつて青巖庵で、張八君と顔五君と、機心とは何か、終日語り合った。人が知恵を

出して、善であれ悪であれ、何かしらを、からくりのように正確に効率的に行おうとする心が機心であるのだろう。機心が生まれると、人がからくりのようになってしまう。天の道に従って生きるのではなく、からくりとして生きてしまう。つまり、道を踏み外してしまふ。そうならないためには、そもそも知恵を捨て去らなければならぬ。漢陰の一丈人がひたすら甕を運んでいたのは、知恵を働かせないためであつたのだろう」。

弟は言う。

「一丈人が自分一人で生きるにはそれでいいでしょう。もしも全ての人が一丈人になるのならばそれでもいいでしょう。知恵というものをまだ人が持っていないかつた時代はそうだったのかも知れませんが、いまとなつては、いくら郷愁を誘う物語であつても、戻れないと思ひます」。

叔父は膝を叩き、杯を盂洗然に渡し、

「大したものだ。君は本当に知恵者だ。言うべきときにはちゃんと言う。君のその鋭い頭は、酒で鈍らせた方がいい。さあ、飲め。さあ、飲め。君に言

われるまでもなく、漢陰の一丈人はまことに現実的ではない。大酒飲みの我輩が言うのはせいぜいそんなところだ。笑ってくれ」。

孟浩然は手を付き、

「では、さらに叔父上にお尋ねします。これで最後です。漢陰の一丈人が現実的ではないのでしたら、逆に最も現実的な方策とは何でしょうか。それを教えてはいただけませんか」。

「提案は二つあると言って、我輩は二つとも言った。もう何もない。この頭には何も残っていない。もうからっぽだ。何も出て来ない。それより、別にささねばならぬものがここにある」。

叔父は下腹を指して立ち上がり、ふらふらと木の蔭へと歩いて行く。

その姿を見送り、

「だいぶお酔いになったようです」。

と、弟が言う。

「頭の内はむしろ冴えておられるのだろう」。

叔父は戻ると、孟浩然の肩を支えに座り、

「今日はすっかり兄さんに馳走になった。だから、ちと兄さんのことも考えてやらねばならないと思います。兄さんは、どうやら、喪が明けて、何かせずにはいられないと思っっているようだ。悌とか孝とか、我輩が言ったのは余計であった。兄さんは徹頭徹尾冷淡になれない。さつき毛公とか言っておった。やめる。何も考えるな。南園はなるようにしかならない。南園老の長男は、この飲んだくれの父親であった。あの親父は、南園は同じままであってほしいと念じていれば同じであり続けると思っていた。まことにぼんくらだ。その長男は、この飲んだくれの長兄だ。あれは親父よりも数等倍のぼんくらだ。念じることすらしていない。それで南園が傾かないはずがない。だから、我輩は酔ってぐだぐだ文句ばかりを並べている。南園のために何もしない点では我輩も同じ仲間のぼんくらだ。ぼんくら揃いの南園であるのだから、このままどんどん貧乏になって、何もかも失って行くのでもいいのだから。もう文句も言うまい。南園の良き日々は、我輩の昔語りのうちにしかない。

それでいいではないか。諸君等の誰かが官人になってくれれば、南園は繁栄を取り戻せると多くの連中は考えている。我輩も以前はそう思っていた。実にあさましい。反吐が出る。孟子はそういうことを教えたのか。貢挙に受かるとは学問ができることなのか。孝も悌も本当のところは何もわかっていないのに、字面ばかりを心得て、試験に通って出世しようとするのはあさましくないのか。そんな奴にぶらさがって、いい目に会おうと期待するのは、あさましくないのか。そんなの止めてしまえ。楮先生を追い出せ。漢陰の一丈人になれ。我輩はそのように提案した」。

叔父は激して拳で地面を叩き、酒を煽り、

「こちらの弟さんは賢い。知恵というものがまだなかった時代ならいいが、いまはそうではないと言う。その通りだ。南園の我等だけがもしも漢陰の一丈人になったら惨めなだけだ。我等が甕を担いでひいひい言っている横で、はね釣瓶で楽々水を汲んでいる。一日だって漢陰の一丈人でいられるはずがない。だから、現実的な策を我輩は言おう。兄さんが尋ねるから我輩は言う。

我輩が言いたいのではない。答えは簡単だ。我輩に言われなくてもわかることだ。襄陽の孟家に腰を折ればいい。我輩の叔父の演殿だ。叔父殿に頭を下げて、南園を任せますと言えばいい。我が一族の繁栄はすぐに取り戻せる。簡単明瞭だ」。

叔父は高らかに笑う。

孟浩然は叔父の顔をじつと見る。弟は顔を顰めている。弟にとつても意想不到的答えではないのだろうか。

叔父はまた酒を飲んで、唇を突き出し、

「どうだ」。

と、兄弟二人を順に睨む。

弟が言う。

「南園の伝統はどうなるのでしょうか」。

「孟子以来千年の伝統か。それはもういいと言ったではないか。それに、あちらの叔父殿も南園老の子だ。我が長兄は南園老の孫だ。そのどちらが南園

の伝統を守れて、どちらが守れないということはあるまい。形骸化した慣習にしがみつくのは伝統を守っているとはいえまい。南園老がもしもその前の時代の慣習を守るだけの人だったならば、あの厳しい時代に南園は滅んでいただろう。楮先生を招いたのだって千年来初めてだった。伝統を守るとは昔のままであることではない。

「しかしながら、あちらのお方と南園の人々とはなかなか合わないように思います。任せるとこちらが申してもあちらは承諾されるでしょうか」。

「叔父殿が遠慮するものか。南園を手中に納めようと虎視眈々と狙っておる。それが悪いとは我輩は思っていない。襄陽の孟家と南園の孟家とは確かに随分と違う。あちらは商売で利を稼いで大きな金を動かし、こちらは土を耕してわずかな余剰を得る。お互いにそうやすやすと馴染むものでもあるまい。我輩もうまくやってはいけなйдらう。それでいいのだ。馴染もうが馴染まなからうが、十年、二十年もすれば我輩などは死んでしまう。叔父殿も亡くなるであらう。そのときに、南園がよくなっていればいいではないか。我輩

の見るところ、南園老の息子の中で、あの叔父殿が南園老に最もよく似ている。姿も声も振る舞いも、我輩の覚えている南園老によく似ている。しかし、我輩はあの叔父殿を好まない。南園老だって、誰もが好いていたのではあるまい。南園老には力があつた。あの叔父殿には力がある。力のある者に従うのは理に適っている。そうは思わぬか」。

叔父は地面を叩き、

「我輩は南園の中の変わり者、嫌われ者だ。あの叔父殿もこの南園の中では変わり者、嫌われ者だ。しかし、世の中から見れば、叔父殿は立派に成功した大した人物だ。我輩はどうしようもないただの飲んだくれだ。我輩のことなどこの際どうでもいい。いいか、南園にはいま全部でいったい幾人いるのだ。酔った頭ではちゃんと数えられないが、皆が皆、そっくりの人間だったら気持ちが悪いだらう。世間からは、南園は、孟子の教えを大切に、褚先生の指導する礼法を守り、風変わりなところだと見られておる。しかし、皆が皆、本当にそうだったら実に気味が悪くないか。我輩のように少しは変わった

た奴がいなくてはおかしいだろう。皆が皆、愛すべき我が長兄とそっくりのぼんくらであつたならば、それは即座に滅びるしかない。いみじくも、こちらの弟さんが言つたように、こちらの兄さんは奇妙な人だ。我輩が見て、南園老の子孫で、皆と明らかに違つて非凡なのは、あちらの叔父殿と、こちらの兄さんだけだ。成程、いまやつとわかつた。南園老の先見の明こそ恐るべしだ」。

叔父は天を仰ぎ、

「南園老は何十年も先を見通していたのだ。楮先生を招いて曾孫達を教育し、貢挙を受けさせて官人にしようとした。それがもしうまくいかなつたときのこととも考えていたのだ。いまわかつた。南園老は曾孫の中でこちらの兄さんを最も可愛がり、南園老は息子の中であちらの叔父殿だけを南園の外に置いた。つまり、二人に南園の将来を託したのだ。あちらの叔父殿か、こちらの兄さんか、どちらかがこの南園の将来を担うと、南園老は見越していたのだ。どちらかではなしに、一緒ならなおいい。我輩が先ほど言つたのは、南

園老の遠大な見通しにまことに適っていたことになる。我輩も大したものだ。酔えば酔うほど知恵が湧く。そこでだ、兄さんに頼むのだが、あちらの叔父殿に頭を下げてもらえないか。他の誰でもなく、兄さんがするのなら、あちらの叔父殿だって、南園をそうそう悪くは扱うまい。我輩はそう考える。実によい考えだ。諸君等も同意するな。どうだ。

弟が何か言おうとすると、

「待て、待て。何も言うな。南園老の定めたことだ。我が南園の前途は万々歳と決まったのだ。祝杯を挙げようではないか」。

叔父は自ら酒を煽り、兄弟二人に一杯ずつ飲ませる。

「二人とも渋い顔をするな。事は定まり、我輩は大いに満足した。酔いが醒めて、全て忘れてしまえばそれまでのことだ。あとの残りは我輩が頂戴しよう」。

瓢箪に口を付けてごくごく飲み干し、

「どうやら兄さんの計略にまんまと落ちたようだ。それも構わぬ。何かわか

らぬことを我輩はほざいたようだ。我輩は寝るぞ。何もかも夢だ。ここで少しは眠っておかぬと、帰れないからな。日が傾きかけたら起こしてくれ」。

叔父は大の字になり、しばらく何やら呟き、それもいつしか高聲に変わる。

弟はその顔を覗き込み、

「いつものようにおっしゃりたいことだけおっしゃって、眠ってしまわれませんでした」。

孟浩然は叔父の顔を見ずに、

「いつもそうなのだろうか。とりわけ、いまのはどうだったのか。あれでお酒を楽しんでおられたのだろうか」。

「何か別のことを言いたかったのでしょうか」。

孟浩然是立ち、眠っている叔父から離れ、

「叔父上は、それが知られてしまうのを好まれないだろう。だから、あのようになされた。私が決してしない二つを提案された。何かを促そうとしたのだろう」。

「鹿門山にはお帰りにならないのですか」。

「叔父上は、そうせよとおっしゃったのか」。

「鹿門山からももう出ないと兄上がおっしゃっても、私はいいと思っています」。

「叔父上もか」。

弟は答えない。

叔父の軒からさらに遠ざかって、空を見上げる。

ふっと足が地を離れ、あくまでも青い空に、奥深い彼方へと吸い込まれてしまふようになる。これは酔って陶然たる心地とは異なる。

身を投げ出してしまいたい。

「私は何を思うのか」。

鹿門山に籠ることはもうないと、父の喪に入る前に決めた。喪が終わり、何かをしなければならぬ。いまのままではいられない。

叔父のように酒を飲み、同じ振る舞いをする訳にはいかない。それは叔父一人のことだ。南園の人々はそれぞれに現実と向き合っている。自分一人が

異なっていてよいはずがない。

鳥の群れが飛び来て、山を越える。目がそれを追うと、心も追う。

「空を翔けるあの鳥を私は追うのか」。

腕を上げて鳥を指差す。その指先よりするりと心が抜け出る。心は飛ぶ鳥に従う。鳥は虚空に消え、心も彼方に消滅する。万山の上に、孟浩然の体ばかりが残る。

身は投げ出せぬ故に、心が去ったのか。

叔父は眠ったまま、弟は立ったまま、孟浩然の空蟬の身はいつしか薄暮に包まれる。

ふっと愁いが宿る。

弟は言う。

「兄上は旅に出られるのですか」。

「そう思うのかい」。

「毛公を見習うのですか」。

「そのようなことを私が言ったかどうか」。

「おっしゃいました」。

心がここにはない間に、空蟬の身がそう言ったのか。

「旅か」。

鳥とともに心はどこに行っていたのか。

「行かれるのですか」。

興が来て、それに引かれて行くようになるのか。

「いつかの日に、私自身を、私の詩を、試すときが来る。誰にも告げずに行く。いつかの朝に、私がいなくなったら、旅に出たと思ってくれ。それまでは、母上にも黙っていてほしい」。

自分はどこに行こうとしているのか。

「御無理はなさいませんように」。

「私はいいい。君に多くのものを負わせるだろう。君以外に頼める者はいない」。

「承知しました」。

自分はいま何を言っているのか。弟は何を承知したのか。

酔いのために、叔父の饒舌のために、去り行く鳥のために、何もかもわからなくなったのか。

明らかなのは、もしも南園から出るのならば、それは必ず張野人の舟に乗ってであるということ。重陽の日に今度は張野人と語ろうか。意に染まぬと拒むだろうか。

行かなければならない。愁いがあり、興が来たのだから。

自分が歩む道は、生まれたときに南園者によって定められていた。それは別の一筋の道が鹿門山の中にあつた。二つの道は別々なのか。

自分は孟子の子孫、なおかつ浩然の名を持つ。この天地の間が浩然の気で満たされているのなら、我が道は必ず正しく存在している。鳥はそれを指し示したのか。阮籍のように袋小路で泣くとしても行く他はない。

■ 游精思題観主山房

精思道観を訪ね、その山房で詠んだ詩。精思道観の観主は王迥で、道
教に通じ、白雲先生と号する。

誤入花源裏 誤って桃花源に入ったかのように

初憐竹逕深 深い竹の道を愛でつつ行きますと

方知仙子宅 まさしく先生のお宅がありました

未有世人尋 世のふつうの人が尋ね来るところではなく

舞鶴過閑砌 鶴が舞いながら砌のあたりを過り

飛猿嘯密林 猿が飛んで林の奥で嘯きます。

漸通玄妙理 ここでようやく玄妙の理に通じて

深得坐忘心 我も物も忘れる坐忘の心を得たのです。

■ 秋登万山寄張五

秋に万山に登って張五に寄せた詩。万山は襄陽の西十一里にあり、北

山ともいう。張五は張野人のことであろうか。

北山白雲裏　この北山は白雲の中にあつて

隱者自怡愉　隱者がよろこぶところであります。

相望試登高　いつも見ているその山に試しに登つてみますと

心飛逐鳥滅　心が飛び去つて鳥を逐い、遠くに消滅します。

愁因薄暮起　愁いというものは、薄暮のために起こり

興是清境発　興というものは、この清境に発するものであります。

時見帰村人　山を下りますと、村に帰る人を見かけるようになり

沙行渡頭歇　河原に沿つて歩いて、渡し場で休みます。

天辺樹若薺　山を顧みると、天辺の樹は薺のように立ちならび

江畔洲如月　川の中の洲は月のような形をしています。

何当載酒来　今度は酒を載せて来て

共醉重陽節　重陽の節に共に酔いましょう。